

第Ⅲ部 昔話の系譜の中のグリム『昔話集』

伝承から単純さ、純粹さ、華美でない清らかさを奪ってしまうような改作はみな、伝承が属している領域から——つまり、飽きることなく繰り返し聞きたいと望まれる領域から伝承を遠のけてしまうのです。[...] 繊細さや精神、そしてとりわけその時代の笑いを盛り込んでくれるウィット、そして感情の繊細な描写などを伝承に付与してしまうことはありうるでしょう。[...] しかし繰り返し読んだり聞いたりするとウィットは我々を疲れさせるのです。受け継がれていくものは、穏やかでもの静かで純粹なものです (『昔話集』第2版序文より, Grimm 1980 Bd. 1 S. 23f.)。



グリム兄弟の像 (ハーナウ)

第1章 昔話集の歴史の中で——ストラパ ローラからアンデルセンまで	137
第1節 描写の詳しさの比較	137
第2節 登場人物の心理描写の比較	156
第3節 理由づけの描写の比較	161
第4節 グリムの描写の裏に「神話」 あり	165
第2章 子ども向きの本としての昔話集の 比較	167
第1節 道徳に関して	167
第2節 性に関して	172
第3節 愛情に関して	176
第4節 残酷さに関して	180

第1章 昔話集の歴史の中で——ストラパローラからアンデルセンまで

グリム兄弟の昔話は、今日の民俗学で重視されているような厳密さを持って集められていないだけでなく、グリム兄弟によって書きかえられてもいるため、現在では信憑性のある民話とは見なされない。そして、「いばら姫」(KHM 050) などで行われた加筆をみれば、それらが創作昔話に近づいていることは明らかであろう。とはいえ、グリム兄弟の昔話は、やはりいわゆる創作昔話とは一線を画している。どのように創作昔話とは異なっているのかということ、本論のこの第Ⅲ部において、具体的に考察していく。要言すれば、グリム兄弟の昔話は民話 (Volksmärchen)——創作昔話 (Volksmärchen) というカテゴリーには収まりきらないのである。そのため、それをどのように呼ぶべきか、という問題が生じ、次のような言葉が生み出されもしたのだった (EM Bd. 2 S. 974)。

ヴィルヘルム・グリム兄弟は様式を変え、完全に「本になった昔話」(Buchmärchen) を作りあげた。いわば洗練された民話 (Volksmärchen) で、それは自由に語る「創作昔話」(Kunstmärchen) とは明確に区別される (Lüthi 1992 S. 100)。

グリムの本になった昔話 (Buchmärchen) は、明らかに、口頭で伝えられた「本当の」民話 (Volksmärchen) と、詩人が作りだした創作昔話 (Kunstmärchen) の中間に位置している (Rölleke 1986 S. 62)。

あるいは、ヨレスが使い始めた「グリムというジャンル」(Gattung Grimm)¹という呼び名が、このグリム兄弟特有の昔話の性質を指すのに用いられる場合もある。

本章では、他の編者 (作者) による昔話集との比較考察を行うことで、このグリム『昔話集』の特徴を探っていきたい。その際に、第Ⅰ部第2章第3、4節で用いた観点に照らし、考察を行う。

第1節 描写の詳しさの比較

ストラパローラ

ヨーロッパにおける昔話集の嚆矢と言われているのは、イタリアのストラパローラ (Giovan Francesco Straparola: 1480 頃-1557 年以後) による『楽しい夜毎』(Le piacevoli notti, 1550-54 年) である。だからこそグリム兄弟は『昔話集 注釈篇』(第3巻) の「文献」において、最初にこの本を取り上げている。

ストラパローラは、北イタリアのカラバッジョ生まれの作家であるが、本名は明らかでない。生没年も未詳で、上記のように推定されているだけである²(Uther 1990 S. 286, Mayer/Tismar 1997 S. 13ff.)。1530 年から 40 年の間にベネチアに住んでいたことくらいしか

¹ Jolles 1972 S. 219.

² グリムはストラパローラについて「15 世紀末から 16 世紀中頃の人ようだ。なぜなら、1508 年にベニスで彼の詩が刊行されているからだ」(Grimm 1994 Bd. 3 S. 297) と記している。

明らかになっていない。『楽しき夜毎』は、ボッカチオの『デカメロン (10 日物語)』(1348-53 年)¹の構成を踏襲しており、13 人の女と大勢の男たちがムラノ島にある邸に集い、カーニバルの 13 夜にわたって計 73 話を語る形式となっている²(増山 1979 S. 143)。そのうちの 21 話が昔話であり、そこにはバジール、ペロー、グリム兄弟の昔話の先駆けとなるものが含まれている³。その他に、笑話やなぞ話も語られている (Mayer/Tismar 1997 S. 13ff.)。

ドイツ語の翻訳としてグリム兄弟が挙げているものは、1791 年のウィーン版と 1817 年のベルリン版がある。しかしこれらの版は入手が不可能だったため、本論では 1904 年のベルリン/ライプチヒ版 (Straparola 1904) に基づいて以下の考察を行う。

ストラパローラの昔話に特徴的なのは、時・場所・人名が明記されることである⁴(Klotz 1985 S. 36)。以下で扱う「豚の王様」(第 2 夜第 1 話)では、イギリス王の Galleotto とハンガリー王 Mathias の娘の Ersilia が結婚し、生まれる息子が豚の姿をしているのだが (Straparola 1904 S. 72)、ハンガリー王 Mathias というのは実在の人物だということ。このようにして虚実を入り混ぜて語っているのである (Klotz 1985 S. 37)。

グリム兄弟は、ストラパローラの話について次のように評している。

多くのものは、心地よく、自然に、優雅に語られている。他方で時として、品がないだけでなく、破廉恥なほどみだらなものもある、それはイタリアの自然で自由な習俗にも、そして時代的にも許されるものではなかった。そして 1605 年には禁書目録に加えられた (Grimm 1994 Bd. 3 S. 297)。

グリム兄弟は 1605 年としているが、河島によれば、宗教改革の時代の 1624 年に、聖職者を冒瀆しているという理由から禁書目録に加えられたという (平凡社 『世界大百科事典』 第 16 巻)。

ストラパローラは、日本ではほとんど紹介されていないため⁵、ここでも少し詳しく見ていくことにしたい。

グリム兄弟の「破廉恥」だという指摘は、例えばトスカナ地方のピストイヤの美しい女の話 (Straparola 1904 S. 173ff.) に当てはまる。彼女は夫がいる身でありながら、自分の美貌で男を惹き付け、「愛の果実を摘んで」楽しませる報酬として、男から靴を手に入れる。すると、ありとあらゆる男が靴を持ってやって来たため、倉庫は靴で一杯になる。ところ

¹ 『デカメロン』では、7 人の女性と 3 人の男性が、毎日 1 話ずつ、10 日間にわたって語る。

² 主に 10 人の女と 2 人の男が、5 話ずつ語る。最後の夜は 6 人の男と 7 人の女が語る。毎晩 5 人の女が選ばれて、歌と踊りを披露した後に、物語を語り、最後に謎を出す (増山 1979 S. 143f.)。

³ 例えば、第 11 夜第 1 話は、ペローの『長靴をはいた猫』の原型と言われている。

また、グリム兄弟は、ストラパローラの話と『昔話集』の話との対応表を『注釈篇』に示している。例えば「箆筒の中の乙女」(第 1 夜第 4 話)が「千枚皮」(KHM 065)に相当するという。この対応表の概要は、高木 2002 S. 304 にも収録されている。

⁴ 民話では、ふつう時・場所・名前は語られない。グリムの『昔話集』でもそうである。例外は「ヘンゼル」や「グレーテル」など。

⁵ 邦訳は、第 3 夜第 4 話「さすらいのフォルトゥーニオ」(ストラパローラ 1963) の 1 話しか見つからなかった。ただし、『楽しき夜毎』の中の昔話については、青山が、フランス語版より概略をまとめている (青山 2000)。ストラパローラに関する論文には、増山 1979 がある。

が彼女が年をとり、誰も振り向かなくなかった時、今度は彼女が靴を代価として与え、男と楽しみ始める。そうして倉庫の靴を使い果たしてしまうのであった。これはグリム兄弟が昔話に数えているものではないが、『楽しき夜毎』には、こうした猥雑な話も収録されている。

さて、グリム兄弟は、ストラパローラの「豚の王様」がドイツの「ハンスはりねずみ坊や」(KHM 108)に相当すると見なしていた。「ハンスはりねずみ坊や」においては、半分はりねずみの姿をした息子が生まれるが、ストラパローラの話では、既に紹介した通り、豚の姿の息子である。

豚っ子が少し大きくなると、人間みたいに言葉を話し、街なかを飛び跳ね回り始めました。そして、ぬかるみや汚いところで、豚みたいに鼻を鳴らしてまわりました。それから、臭く汚いままで帰宅して、父親や母親のところに行って、ふたりの着物に体をこすりつけて、ふたりを糞で汚くするのです。でもそれが一人息子だったものですから、ふたりは何でも我慢しました (Straparola 1904 S. 75)。

このように、動物の姿をした子どもが生まれてくるところは、非常に昔話的である。描写の量はさほど多くはないが、王と妃の洋服を糞まみれにするといった描写には、ストラパローラのスカトロロジー的な傾向が現れている。これはグリムの昔話には見られないものである¹。

さらにグリム兄弟の「品がない」という言葉は、「人形」(第5夜第2話)の話にも当てはまるだろう。妹 (Admantina という名である) は、姉に言いつけられて、紡いだ糸を売りに市場に出かけて行く。しかし老婆の持つ人形に魅せられ、それと交換してしまう。姉にはひどく叱られるが、人形に油を塗ってなでてやる。妹が寝ていると、人形が大便をしたいと言いつける。しかし広げたエプロンに人形がひねり出したものは金なのであった。そうして姉妹は一躍金持ちとなる。それを怪しんだ近所の女が、人形の秘密を嗅ぎつける。そして人形を盗み出すことに成功するが、人形は「しかし、金ではなく、誰も近寄ることができないほど臭い汚物を出す」(Straparola 1904 S. 168)。そのため夫は、人形を窓から外に捨ててしまう。人形はごみと共に堆肥にされるべく、野に放られる。ある時、狩をしている最中に王が便意を催す。そして尻を拭くものを持って来るように家来に命ずる。家来は例の人形を見つけ、王に手渡す。王がそれで尻をぬぐおうとすると、人形は尻に噛み付いて離れなくなる。痛みに耐えかねた王は、人形を離すことの出来る者には、国の三分の一を与える、それが娘であるなら妃にする、という布告を出す。そこで妹 (Admantina) が参上し、人形を離すことに成功し、めでたく王と結婚するのだった (Straparola 1904 S. 160ff.)。

¹ 野村は、グリムの編集方針に「下がかったものや性的なものをさけ」る傾向があったことを指摘している (グリム 1999f. 第六巻 S. 144)。例えば、「のらくら者の国の話」(KHM 158) は、ミラーが14世紀に中高ドイツ語で書いた詩をグリムが翻訳したものなのだが、その結びは次のようになっていた。「そのときにわとりが言いました。／「お話はこれでおしまい。／あほうがズボンにうんこたれた。／お話はこれでおしまい」」(グリム 1999f. (野村訳) 第六巻 S. 144, Rölleke 1998 S. 264)。その結末句をグリムは、次のように変えた。「その時、鶏がこう鳴きました。「コケッコー。お話はこれでおしまい。コケッコー」」(Grimm 1980 Bd. 2 S. 276)。

このように「尻」や「糞」といったことが頻繁に語られており、スカトロロジー的な傾向が目につく。それは、グリム兄弟の話と比較するといっそう明らかである。例えば、(前から後ろからも)金貨を出すろばが登場する「テーブルよご飯のしたくと金貨をはくろばと棍棒袋からでろ」(KHM 036) という話がある。このろばがすり替えられてしまったことに気づかずに、粉屋が「金貨」を出させようとする場面を見てみよう。

粉屋は、「さあ、良く見ていてください」と言って、「ブリックレーブリット」と叫びました。けれども落ちてきたのは、金貨ではありませんでした。それで、このろばがそんな技を持っているわけではないことが分かりました (Grimm 1980 Bd. 1 S. 202)。

このように、グリム兄弟の『昔話集』においても、ろばが出すのは同じ物なのだが、ストラパローラのように「誰も近寄ることができないほど臭い汚物」といった描写はなされない。

とはいえ、全体的に見てストラパローラのものはいわゆる創作昔話ほど描写が多いわけではないため、「創作昔話まではいかないが、民話ではない」と評価されている (Mayer/Tismar 1997 S. 14)。

バジーレ

グリム兄弟が『注釈篇』の「文献」の章で次に取り上げているのは、イタリアのバジーレ (Giambattista Basile, 1575 頃-1632 年) による『ペンタメローネ』 (Pentamerone, 1634-36 年) である。

バジーレは、ナポリ生まれの詩人で、宮廷に仕えたり、地方の総督を勤めた経歴も持つ人物である。『ペンタメローネ』は当初は『お話のなかのお話』 (Lo Cunto de li Cunti) という題で刊行されたが、ボッカチオの『デカメロン (10 日物語)』にならい、1674 年の第 4 版より『ペンタメローネ (5 日物語)』と改称された。構成も『デカメロン』に似せられており、タッデオ大公が昔話を熱望する妻のために 10 人の女を集め、5 日間にわたって語りを繰り返し広げさせるという形をとっている。

バジーレは、収録した話の多くをナポリで聞いたようだ。そしてナポリ方言で書き留めたため、イタリア国内でもあまり読まれることはなかった。1754 年によくイタリア語に、続いて 1788 年にはフランス語に翻訳された。このフランス語版は、ペローらに影響を与えたという。ドイツ語の本格的な翻訳は、フェリックス・リープレヒトによってようやく 1846 年に刊行された¹ (Basile 1982)。

ヴィルヘルムは、『注釈篇』「文献」の章で『ペンタメローネ』を次のように讃えている。

この昔話集は長いこと、他の民族の昔話集と比較しても、最良かつ最も内容豊かなものであった。当時は、伝承自体がより完全だったことに加えて、編者が方言に関する確かな知識を持っていただけでなく、方言の理解の仕方にも秀でていたのであった。内容はほとんど欠けるところがない (Grimm 1994 Bd. 3 S. 302f.)。

¹ この翻訳本に序文を寄せたのは、ヤーコプ・グリムであった。

そして『昔話集』初版第1巻の序文に、グリム兄弟はこれを翻訳して第2巻に掲載する旨を明記していた。これは実現はされなかったが、ヤーコプがそのうちの38話を翻訳(要約)し、中でも「蛇」を雑誌に発表していたことは、既に本論第I部で述べた通りである。その後ヴィルヘルムが、兄の翻訳に手を加え、また訳されていなかった12編を補ったものを『昔話集 注釈篇』(1822年版)に収めた。しかし1846年に上記のリープレヒトによる完訳が出版されたため、これは『注釈篇』の最終版(1856年版)には掲載されなかった(EM Bd. 1 S. 1296ff.)。

さて、『ペンタメローネ』には、(導入の話と結びの話を合わせれば)合計50の昔話が収録されているが、グリム兄弟は、そのうちのおよそ「三分の二がドイツにもあり、しかも今日でもそれはまだ(伝承として)生きている」(Grimm 1994 Bd. 3 S. 303)とみている。実際に、自分たちが集めた昔話の中に、バジールレの話との具体的なつながりを見出し、各話に付けた注釈の中で言及するだけでなく、『注釈篇』の巻末に対照表¹を付けたのだった(Grimm 1994 Bd. 3 S. 305f.)。

例えば、グリム兄弟は「森の中の3人の小人」(KHM 013)と、「三人の妖精」²(3日目第10話)を関連づけている。これは、マルチャーニーゼ村のカラドーニアという後家の話であるが、こうして地名と人名が記されているのも特徴である。さて、この話では、カラドーニアの娘のグラニズィアの容姿が次のように描写されている。

この娘ときたら醜の骨頂で、化け物の女王、取替え子³の鏡でした。頭はシラミだらけで髪はぐしゃぐしゃ、こめかみは髪がうすく、おでこはこぶだらけ、目は火のように赤く、鼻は出来物だらけ、歯は炭のように黒く、喉は狼人間のよう、あごは三角にとがっており、首は鳥のよう、胸は砂袋のようで、肩はアーチ型に膨れ上がり、腕はドリル、脚はトルコのサーベル、足は猿のようでした。ひとこと言えば、頭のとっぺんからつま先まで、かかしのような女、嫌なやつ、いまわしい魔女、そしてちびで太った、正真正銘の小人なのでした。それでも、母親にとっては、そんな欠点も、お人形さんみたいにかわいらしく見えたのでした(Basile 1982 Bd. 3 S. 125f.)。

それに対して再婚した男の娘は次のように美しいのである。

こちらは、この世の美の最大の奇跡と見なされるような娘でした。この娘には美しく魅惑的なひとみ、キスをしたくなるほどうっとりさせる唇、我を忘れさせるほどにミルクのように白い首、ひとこと言えば、かわいらしく優美で、魅惑的で陽気で... (Basile 1982 Bd. 3 S. 126)。

¹ この対照表の概要が高木 2002 S. 386に掲載されている。

² バジールレに関しては、ヤーコプが序文を寄せたリープレヒト訳(ドイツ語)を用いる。邦訳も参照した。タイトルと人名は邦訳(バジールレ 1995)に倣った。

³ コーボルト(家の精)らによって取り替えられてしまった醜い子。新生児は、洗礼を受ける前にこうして取り替えられる恐れがあると信じられていた(谷口 1986 S. 148)。

このように描写が延々と続けられていくのである。そしてこれほどまでに継母が美しいため、カラドニアは憎悪の念をつのらせ、何かにつけて意地悪をするのである。グリム兄弟の「森の中の3人の小人」(KHM 013)においても、状況は似ているが、ふたりの美醜はわずかにこのように記されているだけである。

継娘は美しくて愛らしいのに、実の娘は醜く感じが悪かったので、女は妬ましかったのです (Grimm 1980 Bd. 1 S. 92)。

グリム兄弟が、加筆の際に女性の美しさを好んで描写する傾向があったことを思い返したい。例えば「白雪姫」(KHM 053)においては、白雪姫の美しさと継母の意地悪さの双方が、対比される形で強調されていた。しかしながら、グリム兄弟は、第2版より白雪姫に「かわいい」という形容詞や、「晴れた日のように美しい」という描写を書き添えたにすぎず(この書きかえに関しては、本論第1部第2章参照)、バジーレほどのバロック風の仰々しい描写とは比較にならないほど簡素である。

『ペンタメローネ』には、ヨーロッパに広まる昔話が網羅的に集められているが、こうした描写がなされているため、バジーレはヨーロッパの最初の創作昔話の作者と見なされているのである (Mayer/Tismar 1997 S. 17)。

ペロー

グリム兄弟は、「本格的な昔話収集がようやく始められたのは、17世紀末のフランスであった」(Grimm 1994 Bd. 3 S. 311)として、ペロー (Charles Perrault, 1628-1703年)の名を挙げている。バジーレの話は、大げさな表現を楽しむもので、グリム兄弟の目からしても民話には程遠いものだったのである。

ペローは、弁護士の資格を得た後、ルイ14世に重用されていた大臣コルベールの書記を勤めた人物である。1671年にはアカデミー・フランセーズ¹の会員に選ばれている。近代の優越性を説いた『古代人・近代人比較論』(1688-97年)などの著作がある。1697年に刊行された『教訓つきの昔話集』(Contes du Temps passé, avec des Moralitéz)には息子ピエール・ダルマンクール・ペローのイニシャルであるP・Dが記されているのだが、実際に記したのはシャルル・ペロー自身と考えられている。当時、仙女物語は主に女性によって書かれていたため、アカデミー・フランセーズの著名な会員でもあったペローは、嘲笑されることを恐れて息子の名を借りたのだと解釈されている (私市 2001 S. 35ff.)。

ヴィルヘルムは、ペローの昔話を次のように評している。

ペローは昔話を純粹にまとめた。細かい点を除けば、付け加えもしなかった。彼の(昔話の)スタイルは、当時、既に磨かれて滑らかになっていた書き言葉が許容する限りにおいて、単純で自然である (Grimm 1994 Bd. 3 S. 312)。

¹ フランス学士院にある5つのアカデミーのうち最古のもの。宰相リシュリューによって、フランス語の統一と純化という文化政策の一環として公的機関に制定された。1635年に正式に発足し、1672年に国王ルイ14世が庇護者となって以来、歴代の国家元首の管轄下に置かれている。40名の会員から成る (平凡社『世界大百科事典』第1巻)。

さらに、これらの「フランスの昔話が、イタリアやドイツのものと親縁関係にある」とも主張している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 312)。そしてペローの「眠れる森の美女」が、グリム兄弟の「いばら姫」(KHM 050) に相当するが、ペロー版には、「いばら姫」にはない後半部が含まれていること、その他、ペローの「ろばの皮」が「千枚皮」(KHM 065) に、「愚かな願いごと」が「貧乏人と金持ち」(KHM 087) に、「サンドリヨン」が「灰かぶり」(KHM 021) に相当することを指摘している。

ここでは、ペローの「眠れる森の美女」で、姫が百年の眠りから目を覚ました後の場面を見ておきたい。

その間に、宮殿じゅうの人びとが王女と一緒に目をさましていました。それぞれ自分の務めを果たそうと思ったのですが、誰もが恋をしているわけではなかったため、みな死ぬほどお腹をすかしていました。ほかの人たちと同じように空腹に迫られていた女官は、ついに辛抱しきれなくなり、大声をあげて王女に、食事の用意ができたことを告げます。王子が手を貸して王女を起き上がらせました。王女は正装姿、それみたいそう華やかな正装姿でいます。王子は、しかしお祖母様の時代のような服装で、古風な高い衿¹がついていますね、などとはいいません。王女の美しいことに変わりはありませんでした (ペロー 1982 (新倉訳) S. 166)²。

このように、百年という時間の経過を明確かつアイロニカルに感じさせるような描写は、昔話の文体からは外れていると言える³(Vgl. Röhrich 2001 S. 185)。グリム版の「いばら姫」(KHM 050) は、本論第 I 部第 1 章で引用したが、そこには上記引用中にゴシック部で示したようなアイロニカルな箇所は見られない。

しかし、ペローの話の多くは、ヨーロッパに広く伝わる口頭伝承に基づいたものであり (Klotz 1985 S. 68)、グリム兄弟も指摘しているとおり、全体としては民衆らしさも多く留めている。

¹ 「高い衿」とは、訳者注によれば、「カトリーヌ・ド・メディシスの時代に流行した、厚紙と針金を使い糊で固めたレースの襟、頭の後に扇のように広がっている」もののことである (ペロー (新倉訳) 1982 S. 260)。カトリーヌ・ド・メディシス (1519-89 年) は、フランスの王妃で、1533 年にフランソワ 1 世の第 2 子アンリ (のちのアンリ 2 世) と結婚している。この衿については、ベーン 1989 S. 269f. にも詳しい。

² Perrault 1866 S. 40. ペローからの引用は、新倉訳 (ペロー 1982) に拠る。ただし原典 (Perrault 1866) の該当箇所を指示する。

³ 昔話には、時間という次元も欠けており、昔話は時間の経過に対しても鈍感なのである (Lüthi 1992 S. 20)。リュートイは、この描写によってペローは「昔話に本質的に特有の無時間性を壊している」と指摘している (Lüthi 1992 S. 21)。

同様に、「青ひげ」においても、「近代人」ペローは時間を完全に抽象化することはできなかったことが指摘されている (私市 1975 S. 153)。

オーノワ夫人

ペローの次にグリム兄弟が取りあげているのは、オーノワ夫人 (Marie Catherine Le Jumelle de Barneville, baronne d'Aulnoy, 1650-1705 年) である。15 歳で3倍も年上の男と結婚した彼女は、評判の悪い夫から逃れるために、夫が監獄に入れられるように計略を謀る。しかし、それが露見し逃亡を余儀なくされる。そうして、スペインやイギリスを転々とする生活の後、1685 年にパリに戻り、『スペイン宮廷の記録』(1690 年) などの宮廷秘話、旅行記や、波瀾に富んだ恋愛小説『イポリット物語』(1690 年) を発表した。なかでも 1696 年から 99 年にかけて出版された『仙女物語集』をはじめとする 8 巻の童話集が名高い。これは子どもだけでなく大人 (特に貴族の女性達) にも好評を博し、ペローと共に仙女物語 (Feenmärchen) の流行を生んだ。ペローと同様に、多くのものは口承の昔話を素材としているが、ペローに比べて細部の描写が詳しく、脱線していることも多い (EM Bd. 1 S. 1020ff., 私市 2001 S. 29f.)。

グリム兄弟は、「金髪の美しい乙女」が「正直なフェレナントと腹黒いフェレナント」(KHM 126) に、「青い小鳥」が「鳴きながら跳ねるひばり」(KHM 088) に、「白い猫」が「3 枚の鳥の羽」(KHM 063) と「かわいそうな粉屋の若者と小猫」(KHM 106) に対応し、さらに「ルンペルシュティルツヒェン」(KHM 055) とも関連があると指摘している。そしてオーノワ夫人の昔話をこのように評している。

(ペローと比べて) 良くもあり、悪くもある。悪いというのは、ペローより伝承に忠実でないためで、加筆、拡大、韻文、**道徳的な見解**を混ぜ込んでいるからだ。概してペローよりも素材が恣意的に扱われている。しかしペローと同様に、これらの昔話の大部分には、根底に伝承がある。それ以外の、完全に考え出した箇所は、内容が薄い
ため簡単に見分けがつく (Grimm 1994 Bd. 3 S. 314)。

グリム兄弟が指摘をしているオーノワ夫人の道徳的な見解に関しては、第 2 章で扱うこととして、ここでは、オーノワ夫人の「ロゼット姫」における描写を見てみたい。これは「白い花嫁と黒い花嫁」(KHM 135) に相当するが、ずい分異なるとグリムがみなした話である (Grimm 1994 Bd. 3 S. 229, 316)。どちらの話においても、王のもとに嫁ぐ旅の途中で、花嫁が水の中に突き落とされ、偽の花嫁が送り込まれるのである。オーノワ夫人の話においては、それを行うのは乳母である。

乳母は自分の娘を一所懸命飾り立てました。ロゼット姫のダイヤモンドを、頭といわずどこといわず、そこいら中に飾り立て、一番立派なドレスを着せました。けれどその娘はどんななりをさせても猿より醜かったのです。黒い髪はぎとぎとして、目はやぶにらみだし、足は曲がっているし、おまけに背中に大きなコブが出来ています。いつも機嫌が悪くて陰うつで、文句ばかり言っています。

この娘が船から降りるのを迎えた、孔雀の王の側近の人々は、だれもびっくりして口もきけませんでした (オーノワ夫人 1981 (上村訳) S. 165)¹。

¹ D'Aulnoy 1997 Tome 1 S. 195.

こうした大げさな表現は、バジールに通じるものであり、オーノワ夫人の作品は、典型的な創作昔話となっていることが分かる。

ムゼーウス

ムゼーウス (Johann Karl August Musäus, 1735-87 年) は、イエーナで地方裁判官の息子として生まれ、1769 年にはワイマールのギムナジウム教授となった人物である。著述家としても活躍し、『ドイツ人の民話集』(Volksmärchen der Deutschen, 1782-86 年) を刊行した。当時のドイツには、昔話といえばフランスの仙女物語や『千一夜物語』など外国のものを翻訳・翻案したものばかりがあふれていた。そうした宮廷風の仙女物語に対抗すべく、ムゼーウスは自身の昔話集に「ドイツの」「民話」と銘打ったのである。しかし『ドイツ人の民話集』の中に収められた 18 話のうち、昔話と言えるのは 5 話のみで、その他は伝説など別のジャンルに分類されるものである (Mayer/Tismar 1997 S. 42ff.)。

グリム兄弟は、「リヒルデ」が「白雪姫」(KHM 053) に、「泉の水の精」が「灰かぶり」(KHM 021) と「ホレおばさん」(KHM 024) と「千枚皮」(KHM 065) の 3 話に関連があるとして注釈の中で取り上げている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 337ff.)。

ムゼーウスにも描写が多いが、特にその語り口に見られる「機知とイロニーと風刺」(板倉 1998 S. 298) が特徴的である。それをここでは「3 人姉妹の年代記」で確認してみたい。

伯爵が樫の木の下に腰を下ろし、じゃがいもを食べようとする、怒った熊が向かってくる。熊は、蜂蜜の木が奪われると思ったのである。伯爵は熊にじゃがいもを差し出してなだめようとするが、熊は次のように言う。

「運が悪い奴だ。そんなものではおまえの命は取り返せないぞ。おまえの一番上の娘のヴルフルトを妻にしてくれると今約束しろ。そうしないと、おまえを食べるぞ。」伯爵は恐ろしかったので、アモールにやられたこの熊がもしも要求していたら、娘 3 人だけでなく、妻までも与える約束をしたことでしょう。「背に腹は変えられない」からです。「熊どの、あの子はあなたのものです」と、気を取り直しつつあった伯爵は言いました。そして、ずる賢くも、「ただしこの国の習慣に従って、あなたが支度金を支払い、妻を向かえにいらっしゃることが条件です」と付け加えました。「いいだろう」と熊はぶつぶつ言い、握手をするためにもじゃもじゃの前足を差し出しました。「7 日後に 1 ツェントナー¹の金の支度金を持って、妻を連れに行くことにする。」「いいだろう、男に二言はない」と伯爵は言いました。そうしてふたりは平和に別れました。熊は小走りに自分の洞穴へ行き、伯爵はぐずぐずせずにこの恐ろしい森を出ました。そして星の瞬く頃に、ぐったりとなって森の城に着きました (Musäus 1972 S. 10ff.)。

グリム兄弟は、このムゼーウスの話に取材したものを『昔話集』の初版 82 番 (KHM 082a)

¹ 鈴木訳の注釈によれば、プロイセンやザクセンでは、55 kg、ハンブルクでは 56 kg であったという。また、ドイツ関税同盟設立後、その領域内では 50 kg であった (ムゼーウス 2000a S. 271)。なお、本論でムゼーウスを訳出する際には、鈴木満訳を参考にした。

として採用していた。グリム兄弟版では伯爵でなく王となっているが、その他の状況は同じである。

「おまえのじゃがいもなんて欲しくはない。おまえ自身が食べたいんだ。おまえの一番上の娘をおれにくれるという以外には、おまえが逃れるすべはないぞ。もしもくれるのなら、その上、ツェントナーの金をおまえに与えよう」と言いました。食べられるのが恐ろしくて、王はこう言いました。「娘はさしあげますから、私は容赦してください。」すると熊は王に道を教えてあげただけでなく、後ろから王に向かって「7日したら、娘をもらいに行くぞ」とうなりました。

けれども王は、落ち着いて家へ帰りました (Grimm 1986 Bd. 1 S. 365f.)。

このように、グリム兄弟は不要と感じたところをかなりそぎ落としていることが分かる(また、グリム版においては、熊が自分からお金をあげると申し出ているところが異なっている)。

それでもこの話には満足していなかったようで、ヤーコブは1813年1月7日のアルニム宛の手紙で、こう語っている。『昔話集』の中で一番ひどい話は82番の3人姉妹の話だと思います。これはムゼーウスから抜き書きしただけのものです。これは明らかに本物の話で、考え出した話でないとしても、全体に口承の話の新鮮さが欠けているのです」(Steig 1970 S. 255)。そして、第2版でこれを別の話「賭博師ハンス」(KHM 082)と差し替えたのであった。

A. L. グリム

A. L. グリム (Albert Ludwig Grimm, 1786-1872年) は、グリム兄弟と血縁関係はない人物で、ハイルブロン近郊で牧師の次男として生まれている。本論でA. L. グリムに言及する際には、グリム兄弟と区別するために、必ず「A. L.」を付す。

A. L. グリムは、『リーナの昔話集』(1816年) 序文に自ら記しているように、幼少期に祖父の語る『千一夜物語』に親しんだようだ。後にハイデルベルク大学に学び、アルニムとブレンターノによる『少年の魔法の角笛』に寄稿をし、ブレンターノの影響で伝説も集めていた。ヴァインハイムで学校教育に従事し、同市の市長も勤めている。

「3人の王子」¹や戯曲形式の「白雪姫」が収録された『子どものための昔話集』の刊行は1808年であるため、『昔話集』の出版ではA. L. グリムの方が、グリム兄弟よりひと足先であったことになる。

グリム兄弟は、『昔話集』初版第1巻(1812年)の序文で、それまでのドイツで刊行された昔話集についてふれている²ののだが、その中でA. L. グリムについては次のように評している。

¹ ヤーコブ・グリムが書きとめた「ぬけ作」(1810年手稿)は、A. L. グリムの「3人の王子」を典拠として書きとめたものであった (Rölleke 1994 S. 470)。これは、初版を刊行する段階で改作され、「みつばちの女王」(KHM 062)というタイトルで『昔話集』に採用された。初版では64番のIIであったが、第2版より62番となった。

² 具体的に言えば、序文の脚注で取り上げられている。

数年前に同姓の A. L. グリムがハイデルベルクで『子どものための昔話集』という題の本を刊行した。全く成功していないものであるが、それは私たちのものとは一切関係がない (Grimm 1986 Bd. 1 S. XIXf.)。

後の昔話研究において A. L. グリムがさほど注目を集めなかった理由のひとつとして、グリム兄弟によるこうした低い評価¹が取り上げられている。しかし実際には 12 の外国語に訳されるなど、受容の面では軽視できないものがある (EM Bd. 6 S. 167ff., 板倉 1998 S. 307)。

そしてまた、グリム兄弟による低い評価を受けて、A. L. グリムが、1816 年に『リーナの昔話集』の序文の中で「ラプンツェル」(KHM 012) を批判し意趣返しをしていたことは、本論第 I 部第 2 章で言及した通りである。

ではここで、両グリムの昔話を比較してみよう。グリム兄弟の「漁夫とその妻の話」(KHM 019) は、ルンゲ (Philipp Otto Runge, 1777-1810 年)²の話を採用し、ポンメルン方言も踏襲したものである。ヴィルヘルムは、「漁夫とその妻の話」に付けた注釈の中で、A. L. グリムの「ハンス・ドゥーデルデー」が類話であることを指摘し、この話の内容を簡単に紹介しているが、やはりここでも「全体的に不十分だ」という辛口の評価をしている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 41)。「ハンス・ドゥーデルデー」の方は、ルンゲの話から採ったものではなく (EM Bd. 6 S. 168)、標準ドイツ語で語られている。

これは、魚に願いを叶えてもらう話であるので、その場面を見てみよう。

「ハンス・ドゥーデルデー」においては、妻は最初から不満をこぼしている。そして自分たちが隣人らのようにまともな家に住むことが出来ないのは、夫の働きが充分でないせいだと文句を言う。そのため、ハンス・ドゥーデルデーは翌日、次のような行動に出る。

それで次の朝、ハンス・ドゥーデルデーは早く起きて、湖に魚を捕りに行きました。

そのうち、人々が畑に出てきて働くのが見えましたが、彼はまだ何も捕かまえていませんでした。そして昼になり、草を刈る人たちが木陰に座り昼食を食べましたが、いまだに何も捕れませんでした。彼はがっかりと腰をおろして、手提げからかびの生え

¹ また、グリム兄弟は『昔話集 注釈篇』(第 3 巻)においても A. L. グリムの昔話集に対する言及をしているが、『子どものための昔話集』には口承のものに拠る話はただの 3 話しかないことを指摘するのみで (Grimm 1994 Bd. 3 S. 343f.)、特別な関心は感じられない。

ただし、本の題名も似ていたため、グリム兄弟は混同されることを嫌悪したようだ。

実際に、グリム兄弟の『昔話集』のオランダ語選集 (アムステルダム 1820 年) において、「いばらの中のユダヤ人」(KHM 110) の替わりに、A. L. グリムの「バイオリンを持ったちびのフリーダーの愉快な話」が採用されるという不思議な事が起きている。グリム兄弟版は、ユダヤ人が虐待を受ける話であるため、ユダヤ人を考慮して差し替えられたようだ。この経緯については、佐藤による解説がある (A. L. グリム 1994)。

² 北ドイツのウォルガスト生れのドイツ・ロマン派の画家。コペンハーゲンのアカデミーに学んだ後、1801 年よりドレスデン、ハンブルクに住みティークら多くのロマン主義文学者と交流していた。アルニムらが発行していた機関紙『隠者新聞』に、「ねずの木の話」(KHM 047) などを発表した。

たパンを取り出して食べました。その後、また魚捕りを始めました。そして陽は傾いて、草を刈る人たちは家に帰り、羊飼いは群れを柵囲いの中に追い込み、牛の群れは去り、畑は静かになりました。それでもハンス・ドゥーデルデーはまだ立ち続けていましたが、魚は一匹も捕かまえていませんでした。

薄暗くなったので、ハンス・ドゥーデルデーは帰ろうかと思いました。今度こそ何か捕れるかもしれないから、もう一度網を入れようと考えました。彼は網を入れて、魚をおびき寄せたかったので、こう呼びかけました。

「魚さん、湖の魚さん」

「何が望みなんだい、ハンス・ドゥーデルデー」

一匹の小魚が泳いで寄って来て、頭をちょっと水面から出して、こう尋ねたのです。

あわれなハンス・ドゥーデルデーは、この小魚にはびっくりしたのですが、よく考えてみれば、「うん、こちらの望みを尋ねているだけなのだったら、小魚に何度も尋ねさせることはない」と思いました (A. L. Grimm 1992 S. 80f.)。

そこで、まともな家に住みたいという妻の願いを思い出し、ハンス・ドゥーデルデーは別荘を願うのである。つまり、捕らえられた魚が逃がしてもらう代わりに願いを聞いてあげるのではなく、突然魚が現れて、願いを叶えると言い出しているのだ。

これに対して、グリム兄弟の『昔話集』では、上記の場面は次のように語られている。(A. L. Grimmでは、漁師の名がハンス・ドゥーデルデーであるが、グリム兄弟版では、漁師に名前はない。)

漁師は、毎日魚を釣りに出かけて、そうしてずっと釣りをしていました。

そしてある日、漁師は座って釣りをして、透き通った水の中を見つめていました。そうしてずっと座っていました。

すると釣竿が底の方へ深く引っぱられました。竿をあげると、大きなひらめがかかっていた (Grimm 1980 Bd. 1 S. 119)。

比較すれば一目瞭然のように、グリム兄弟版では A. L. Grimm と異なり、非常に簡素に語られていることが分かる。そして、ひらめを釣った漁師は、乞われてひらめを逃がしてあげている。その上、漁師は最初は願い事もせずに家に帰っている。彼は妻に言われて初めて、願い事をしに海に戻って行くのである。

既に第Ⅱ部で指摘した通り、グリム兄弟は、見逃してもらう代わりとして捕らえられた魚が贈りものをするとともに、神話的な要素を見出していたのである¹。さらにインドの『マハーバーラタ』でブラフマーが魚の姿となりマヌに自分を捕らえさせ、未来を予言するところとの関連も視野に入れていたほどである。グリム兄弟がそうした価値を見出していたところは、A. L. Grimm では全く語られずに、魚は突然やって来て願いを叶えている。

¹ 「それらが人間に捕らえられると、逃がしてもらうために贈り物をしたり予言をしたりする。子どものための昔話に出てくるひらめもこの種のものである」 (J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 425)。

ところで、A. L. グリムは、『子どものための昔話集』の序文を「親と教育者へ」宛てて (An Aeltern und Erzieher) 書いている。なぜなら、昔話は子どもたちの手に直接渡すよりも、親や教育者に渡す方が好ましい、と考えるからである。そして、夕刻に子どもたちに読み聞かせてやってほしい、と親たちに呼びかけているのである (A. L. Grimm 1992 S. IV)。彼はまた、「白雪姫」や「ハンス・ドゥーデルデー」には、教育的な配慮をもって手を加えてあるため、子どもに安心して与えることの出来るものになっているとの明記もしている (A. L. Grimm 1992 S. VII)。

確かに A. L. グリムの昔話をみると、教訓色が明確に打ち出されていることが分かる。彼は、そもそも教育と昔話を結びつけるという目的のために、『子どものための昔話集』や『リーナの昔話集』を刊行したのだった。こうした努力が買われて、1816年には『子どものための昔話集』の「ハンス・ドゥーデルデー」と「誠実な友情について」の2話が、ハノーファーの学校読本に採用されている。これは昔話が学校読本に採用されるようになる端緒でもあった (佐藤 1997 S. 175)。A. L. グリムの昔話の中の教訓については、第2章にてまとめて言及する。

ベヒシュタイン

ベヒシュタイン (Ludwig Bechstein, 1801-60年) はワイマールに生まれ、生後まもなく里子に出されている¹。薬剤師の修業の後、ライプチヒとミュンヘンの大学で哲学、歴史、文学を学んだ。マイニンゲンで大公図書館の司書となり、当地を拠点として各地を歩き、伝説や昔話を集めて出版した。1845年に彼が刊行した『ドイツ昔話集』は、グリム兄弟の『子どもと家庭のための昔話集』をしのぐ人気であった。これは1853年版にルートヴィヒ・リヒターの木版画が添えられることにより、さらなる成功を収めた。20世紀の初頭頃までは、子どもの本として、家庭だけでなく学校においてもグリム以上に読まれていたという (EM Bd. 2 S. 18)。

「いばら姫」(KHM 050) はベヒシュタインにもほぼ同じ話が掲載されているので²、冒頭の場面で、生まれたばかりのいばら姫に贈物が与えられるところを比較してみたい。

グリム兄弟

かしこい女たちは、その子にすばらしい贈物をしました。ひとり「徳」を、もうひとり「美しさ」を、3人目は「富」を、というように、この世で望むべきもの全てが与えられたのでした (Grimm 1980 Bd. 1 S. 257)。

ベヒシュタイン

かしこい女たちは、王の子どもにとってもすばらしい贈物をしましたが、「美しさ」は贈りませんでした。なぜならそれは、その子にはもう備わっていたからです。ですか

¹ ベヒシュタインの不幸な生い立ちは、稲村 1992 で紹介されている。

² ベヒシュタインの『ドイツ昔話集』には、先行するグリム兄弟の昔話と非常に似た話がある。「いばら姫」、「白雪姫」、「死神の名づけ親」、「ヘンゼルとグレーテル」などは、グリムのテクストへの依存性の高さが指摘されている (Schmidt 1984 S. 70 など)。ただし、同じ原典からそれぞれが独自に採用した場合もある (「粉屋と水の精」と「池の中の水の精」)。

ら、「親切さ」「快活さ」「優美さ」「優しさ」「謙虚さ」「信心深さ」「品の良さ」「徳」「誠実さ」「理性」「富」を与えました。そして12番目のかしこい女が、祝福を口にしようとした時…… (Bechstein 1999 S. 242)。

このようにベヒシュタインの昔話では、グリム兄弟の昔話よりも描写が詳しい場合がほとんどである¹。ベヒシュタインは、美德を与えるかしこい女の数(11人)と美德の数を一致させることで合理性を持たせているが、昔話はそこまで合理的である必要はない(Schmidt 1984 S. 74)。また、上記引用文中のゴシック部は、ベヒシュタイン特有のアイロニーである²。

それでもベヒシュタインの昔話は、創作昔話よりは民話に近いと見なされている(Lüthi 1975 S. 186, Derselbe 1992 S.100f.)。

ハウフ

ハウフ(Wilhelm Hauff, 1802-27年)は、シュトゥットガルトに生まれた。7歳で父を失い、祖父の豊富な蔵書に囲まれて成長し、チュービンゲン大学で神学を修めた。物語作者としての才能を若くして開花させ、『悪魔の覚書からの報告』(1826年)、歴史小説『リヒテンシュタイン』(1826年)、風刺小説『月の中の男』(1826年)、それから3作本の『教養ある階層の子女のための昔話年鑑』(Märchen-Almanach auf das Jahr 1826 für Söhne und Töchter gebildeter Stände)を次々と発表した。第1作は『隊商』(1826年)、第2作は『アレクサンドリアの長老』(1827年)、第3作が『シュペッサルトの宿屋』(1828年)である。しかし1827年に25歳の若さで病没した。

ハウフは、昔話、伝説、『千一夜物語』などに取材して作品を執筆したのだが、『隊商』と『アレクサンドリアの長老』の舞台がオリエントであることから分かるように、とりわけ『千一夜物語』の影響を強く受けている。『昔話年鑑』では第3作のみ、彼の故郷のシュヴァーベンが舞台となっている。

『昔話年鑑』は枠物語の形式をとっているが、ホフマンの『ゼラーピオン同人集』やテイクの『ファンタズス』のように、枠が枠内物語の語られる場を形成しているだけでなく、ハウフの『隊商』と『アレクサンドリアの長老』においては、枠の筋と枠内の物語が内容的にも結びついている。例えば、後に言及する「切られた手の話」(『隊商』)は、枠筋に登場する語り手自身が体験した話という設定となっている。加えて、枠筋自体が展開していく凝った構成になっている(畑沢 1990 S. 75)。

またハウフの『昔話年鑑』には、伝説的な話も含まれている。例えば、『シュペッサルトの宿屋』の「鹿の銀貨の伝説」では、ドイツのオーバーシュヴァーベンという具体的な地名が挙げられるだけでなく、舞台となるホーエンツォレルン城の跡が今日でも残っているということが語られている。

¹ ただし、「いばら姫」(KHM 050)の目覚めの場面は、例外的にベヒシュタインの方がグリムよりも描写が少ない。

² ベヒシュタインのアイロニーに関しては、西口 2001 参照。

ではここで、創作昔話らしいハウフの描写を見てみたい。『アレクサンドリアの長老』の「小人のハナスケ」は、醜い小人の姿に変えられた少年の話である。この少年の変わり果てた姿が、詳細に描写されている。

ヤーコプの目は、豚の目のように小さくなっていました。ところが、鼻はとてつもなく大きくて、口を越えあごのところまで垂れ下がっていました。首は完全にとり去られてしまったようでした。というのも、頭が肩にめり込んでいて、左右に動かすにはひどい痛みを伴ったからです。体は、12歳だった7年前といまだに同じ身長でした。でも普通の人々が12歳から20歳まで縦に伸びたとすると、ヤーコプは横に伸びたので、背中と胸がひどく膨らんでおり、まるで中がいっぱい詰められた小さな袋みたいに見えました。こうした大きな上体が、小さな弱々しい足の上に乗っており、足は、その重荷に耐えられそうもありませんでした。他方で、体にぶら下がっている腕は、普通の大人の腕くらい大きかったです。手はごつくて黄褐色で、指は長くて蜘蛛のようでした。それを伸ばすと、かがまなくても地面に届きました (Hauff 1969 Bd. 2 S. 125f.)。

グリム兄弟の昔話では、「いばら姫」(KHM 050)においては確かに城の中の描写が非常に増やされていたが、ひとりの人物についてのこれほどの描写はなく、またその他の、例えば「強盗のお婿さん」(KHM 040)のお婆さんには、第3版より「頭をがくがくさせていました」という描写が付け加えられてはいるが、それでもハウフほどの詳しい描写には到っていない。

そして、昔話では王座が幸福の象徴となっていることが多いが、ハウフの昔話では、主人公が最後に王女と結婚して、王となって階級を上昇するといったことが起こらない(後に言及する「偽の王子の昔話」など)。「冷たい心臓」においても、主人公は途中で多くの金を手に入れるが、最後には金銭よりも大切なものに気づき、もとの炭焼きに戻って満足して暮らすのである。これに対して宮下はこう指摘している。

ロマン主義の作家たちの作品に見られた哲学的な考え方や孤独の深さといったものは、ハウフの作品にはない。むしろ、都会のつつましい小市民生活に安住することを好ましいことと考えはじめていた一八二〇年代のドイツ人の小市民的な生活感情をよく反映している(宮下 1997 S. 111, Vgl. Mayer/Tismar 1997 S. 101)。

そのためハウフは、ビーダーマイヤー的作家とも言われている(畑沢 1990 S. 80)。ここで指摘されている「孤独」に関しては、次節で考察する。また、昔話においては、現実的には実現不可能な事柄が超自然的な力によって可能となるが、ハウフの昔話では、こうした助力(者)が登場することもない¹。主人公は、最終的には元のさやに納まり、堅実な幸

¹ 例えば、主人公を王座につけるための働きをする助力(者)のことである。主人公を危機から救うだけの仙女の笛ならば、「ザイドの運命」に登場する。この笛については、次節で言及する。

せを手に入れている。そうして期待も結果も現実の領域内に留まっているのである。こうした点や、仕立て屋が王座に着くという非現実性をもはや容認することができない点に(「偽の王子の昔話」)、畑沢は、ハウフのリアリズムを見て取っている(畑沢 1990 S. 80)。

ブレンターノ

ブレンターノ (Clemens Brentano, 1778-1842 年) は、エーレンブライトシュタイン (現在はコブレンツの一部) に生まれた。父はイタリア系商人、母はゲーテが想いをよせたマクシミリアーネ・フォン・ラ・ロッシュで、祖母が女流作家のゾフィー・フォン・ラ・ロッシュであった。妹のベッティーナは、のちにアヒム・フォン・アルニムと結婚している。

ブレンターノはイエーナの大学時代に前期ロマン派の詩人たちと交わり、文筆活動に入った。自伝的小説『ゴドウィ』(1801年) などがある。ハイデルベルクでアルニムと民謡集『少年の魔法の角笛』(1806-08年) を共同で編纂して注目を浴びた。またアルニムに協力して機関紙『隠者新聞』(1808年) を刊行している。ここには、後にグリム兄弟が『昔話集』に採用することになる「ねずの木の話」(KHM 047) をルンゲが寄稿していた。

ブレンターノは父親の書齋でバジールの『ペンタメローネ』のイタリア語訳を見つけ、それをドイツ語に書きかえようと思い立ち¹(深田 1984 S. 337)、一連の『イタリア昔話集』が作られた。それには、「ミルテの精の昔話」「薔薇の花びらの昔話」「ゴッケルとヒンケルの昔話」²などが含まれている。さらに、ドイツの昔話や民謡をもとに『ライン昔話』も著した。その中の「ライン河と粉ひきラートラウフの昔話」は、ハーメルンの鼠とり男、ローレイ伝説などに取材したものだが、非常に拡大された話となっている。

『イタリア昔話集』の「ミルテの精の昔話」「薔薇の花びらの昔話」などは、多少、描写の多さも目につくが、後に引用するティークやホフマンに比べて簡素で民話に近いものである。それに対して『ライン昔話』の方は、各話の長さが特徴的で、韻律詩がふんだんに盛り込まれ、ブレンターノの想像力が駆使され、話が幾重にも広がる創作昔話となっている。

ブレンターノの昔話の特徴のひとつは、登場人物の名前である。「薔薇の花びらの昔話」では、王子の名が「タエマナシ王子」(Prinz Immerundewig)³となっており、本文での「絶え間なく」(immer und ewig) という言葉とともに効果的に用いられている。また「ゴッケルとヒンケルの昔話」においては、男の名はゴッケル (Gockel)、その妻はヒンケル (Hinkel)、娘はガッケライア (Gackeleia) となっている。伊東の注釈によれば、ゴッケルとガッケライアは鶏の鳴き声の擬似音から作った名である(ブレンターノ 1976 S. 152)。ヒンケルはひよこの意である。

さらなる特徴を挙げるならば、「ゴッケルとヒンケルの昔話」の舞台は、ゲルンハウゼン

¹ ブレンターノは、1805年には既に『ペンタメローネ』のイタリア語訳(選集)を所有していた。グリム兄弟は1809年と1817年にそれを貸してくれるように頼んでいるが、ブレンターノはその要望に応えなかった。

² 「ミルテの精の昔話」は『ペンタメローネ』の「天人花」(第1日第2話)、「薔薇の花びらの昔話」は「奴隷娘」(第2日第8話)、「ゴッケルとヒンケルの昔話」は「雄鳥の石」(第4日第1話)に取材したものである。

³ 池田訳に拠る(ブレンターノ 1992)。

¹という実在の市であり、「ひと打ち7殺しの仕立て屋の昔話」においては、アムステルダムという地名が語られていることがある。こうして具体的な地名や人名が明記される点においても、民話と一線を画している。

『ライン昔話』の「ひと打ち7殺しの仕立て屋の昔話」にはアムステルダムの水が涸れてしまう場面があるのだが、それは次のように詳しくユーモラスに描写されている。

どの運河も天水溜めも水が涸れていました。街には一滴も水がなくなっていたのです。お茶もコーヒーも沸かすことができませんでした。そして普段はいつも家を上から下まで水できれいに洗い流していた女中たちも、どうしてよいか分かりませんでした。アムステルダムに来ていた船はみな、運河の底で動かなくなっていました。旅行者たちは船から降りて、歩いて街に入ってきて来ました。彼らはその話をする事によって、嘆きの声をますます増やしていたのです。そして人々は、枯れた水源の底 (Grund) を見ることはできたのですが、そうなった本源 (Grund) は分かりませんでした (Brentano 1978 S. 274f.)。

最後は言葉遊びである。ブレンターノは、こうした言葉遊びの他、「イローニッシュな批評」「パロディ、風刺」などを巧みに盛り込み、「手の込んだ、成熟した人間向きの」創作昔話を作り上げている (深田 1984 S. 340)。

ティーク

ティーク (Ludwig Tieck, 1773-1853 年) は、ベルリンに生まれた。若くして文筆活動に従事し、大学時代は、同郷で同窓のヴァッケンローダー (Wilhelm Heinrich Wackenroder, 1773-98 年) と親交を結び、彼の宗教的・神秘的な資質に影響を受けたという。ティークは、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』にならい、『フランツ・シュテルンバルトの放浪』などを書いている。非常に多才・多作であった。

ティークは、伝統的な民話の形を借り「金髪のエックベルト」(1796年) やペローに取材した「長靴をはいた牡猫」(1797年) などを書き、1797年に『民話』(全3巻)として刊行した。「金髪のエックベルト」は、後に『ファンタズス』(1812-16年)(全3巻)にも収められた。その他にも『美しいマゲローネ』、『ハイモンの子らの物語』、『忠臣エックルトとタンネンホイザー』など、民衆本を改作した作品も発表している。

代表作「金髪のエックベルト」はロマン派で最初の創作昔話といわれている。ここではこの作品の導入部を少し見ておきたい。

ハルツ地方のとある場所に、ふだん金髪のエックベルトと呼ばれている騎士が住んでいました。年は40くらいで、中背といったところでした。短く切られた明るい色の金髪が、瘦せて青ざめた顔にぴったりとかかかっていました (Tieck 1986 S. 3)

¹ フランクフルト・アム・マインの東、キンツィヒ川沿岸である。「ゴッケルとヒンケルの昔話」はバジールに取材した話であるが、舞台はドイツに置き換えられている。

このように、エックベルトの様子が具体的に描き出されている。ティークの細かい描写については、次節以降でさらに詳しく考察したい。

ホフマン

ホフマン (Ernst Theodor Amadeus Hoffmann, 1776-1822 年) は、東プロイセンのケーニヒスベルク (現ロシア領カリーニングラード) に生まれた。同地の大学で法律を学び、司法官の道を進むが、音楽と絵画にも情熱を傾けていた。1804 年よりワルシャワ所在の南プロイセン政府の政府顧問官に任官するが、1806 年にワルシャワがフランス軍に占領されたために、失職している。1808 年以降は、バンベルクなどで音楽指揮者を務めるなどして食いつないだ。文学活動を始めたのもこの頃で、1816 年にベルリン大審院判事に任命された後も、昼は優れた司法官、夜は文学仲間と飲酒にふける二重生活を送り、数多くの作品を書いた (EM Bd. 6 S. 1151ff.)。

『昔話百科辞典』(EM) は、ホフマンの作品のうち『黄金の壺』(1814 年)、『くるみ割り人形と鼠の王様』(1816 年)、『よその子』(1817 年)、『小人のツァヘス』(1819 年)、『ブランビラ王女』(1820 年)、『王様の花嫁』(1921 年)、『蚤の親方』(1822 年) の 7 編を、創作昔話と見なしている。

ホフマンの話では、昔話 (魔法昔話) 風に、最初は調和の「欠如」¹から始まり、主人公が試練を乗り越えて、再び調和を獲得するパターンが見られる。そして登場する援助者もさることながら、『王様の花嫁』の魔法の指輪、『蚤の親方』の魔法のレンズなど、用いられる小道具も昔話風である (EM Bd. 6 S. 1152f.)。

しかし、例えば『黄金の壺』の冒頭でアンゼルスがお婆さんに衝突する場所が、「ドレスデンの黒い門のところのマルクト」というように具体的に設定されているところは、民話の文体からは外れている (Mayer/Tismar 1997 S. 89)。

『小人のツァヘス』において、プルヒャーとバルタザールが目にする不思議な男が乗る馬車の様子が、詳しく描写されているので、その場面を見てみたい。

ふたりはびっくりして、根が生えたみたいにその場に立ちつくしてしまいました。目の前を、中国風の服装をした男が、森の中をゆっくりと通り抜けて行ったのです。ただ、その男は、風切羽がついているふっくらしたビレッタ²を被っていました。馬車は、きらきら光るクリスタルで作られた、開いた貝殻のように見えました。両輪も同じ素材で出来ているようでした。両輪が回転するたびに、ハーモニカの音が鳴り響きました。それが、ふたりが遠くから耳にした音なのでした。そして黄金の馬具をつけた、雪のように白い 2 頭の一角獣が馬車をひいていました。その上には御者の代わりに銀の雉が座っており、金の手綱をくちばしでくわえていました。車の後ろには大きな金のかぶと虫が一匹のっており、またたく羽をはためかせており、そうすることで貝殻の中に座っている不思議な男に冷気を送っているようでありました (Hoffmann

¹ プロップが指摘した魔法昔話の構造は、「加害」もしくは「欠如」で始まり、「結婚」もしくはその他の方法による解決（「加害」の除去）で終わる。

² 裁判官・聖職者・大学教授などが用いるつばのない平たい帽子。

1967 S. 158)。

ホフマンに関しても、『昔話百科辞典』で創作昔話と見なされている話のうち、比較に有効なくつかのものを次節以降でさらに見ていく。

アンデルセン

アンデルセン (Hans Christian Andersen, 1805-75 年)¹は、デンマークのオーデンセで生まれた。靴屋の父親が『千一夜物語』を読み聞かせてくれたという。また貧救院の老女たちからも昔話を聞いていたようである (EM Bd. 1 S. 490ff.)。

14 歳の時、演劇への情熱に駆られてコペンハーゲンに出て、役者として舞台に立ち、戯曲を書いたりもした。その後ラテン語学校で教育を受けたのち、詩作を始める。1833-34 年のイタリア旅行の後、小説『即興詩人』(1835 年)を著し、頭角を現す。外国旅行をし、優れた紀行文を書いた。しかし彼の名を有名にしたのは、『みにくいアヒルの子』『雪の女王』『マッチ売りの少女』など、一般に童話と呼ばれている一連の創作昔話である。

アンデルセンが創作昔話を書き始めたのは30歳頃からで、その総数はおよそ150に及ぶ。「火打ち箱」など初期の作品は、民話に取材したものであった。アンデルセンの創作昔話の多くがハッピー・エンドでないことも、特徴と言える (Mayer/Tismar 1997 S. 108)。

アンデルセンには、「野の白鳥」というグリム兄弟の「6羽の白鳥」(KHM 049)に相当する話があり、この2つの話は基本的な構造が同じであるので²、ここでその比較をしておきたい。

「野の白鳥」では、王女エリサの11人の兄は呪いによって白鳥にされる。兄たちを救うには、エリサはイラクサで11枚のシャツを編まなくてはならない。さらにその間は口をきいてはならないのである。エリサはある王と結婚するが、墓場へイラクサを採りに行くため、魔女と勘違いされ、火あぶりの刑に処されることになる。すんでのところまで白鳥が飛来し、シャツを投げると、兄たちは元の姿を取り戻す。そして、ようやくエリサも真実を語る事が出来るようになる。

「いまこそ、わたしはものを言うことができます！」と、エリサは言いました。「わたしにはなんの罪もありません！」

このできごとを見ていた人々は、エリサを、まるで聖者のように拝みました。しかし、エリサは死んだようにぐったりして、にいさんたちの腕の中に倒れました。いままでの張りつめた気持ちと、心配と、苦しみとが、一時に出たのです。

「そうですとも、妹にはなんの罪もありません！」と、一番上の王子が言いました。そして、これまでのことを、残らず物語りました。その話のあいだに、幾百万とも知れぬバラの花のかおりが漂ってきました。見ると、火あぶりに使う、たきぎの一本一本に、根が生え、枝が出て、それに赤いバラの花が咲いているのでした。そして、そ

¹ デンマーク語ではアナセンである。

² この2つの話の構造と文体の比較は、今村 1992 で詳しく行われている。また、「6羽の白鳥」(KHM 049)、「7羽の鳥」(KHM 025)と、アンデルセン「野の白鳥」に関する考察は、リュウティにもある (Lüthi 1989 S. 39ff.)。

こに、なんとも言えないよい匂いのする、高い大きな生垣ができあがっているのです。その一番上に、星のように輝く真っ白い花が一輪咲いていました。王様はその花を摘んで、それをエリサの胸の上におきました。すると、エリサの胸に、平和と幸福とが満ちあふれて、エリサは目をさました。

すべての教会の鐘が、ひとりでに鳴りだしました。そして、いろいろな鳥が群れをなして飛んできました。こうして、どんな王様もまだ見たことがないような、ご婚礼の行列ができあがって、お城へむかって進んで行きました (アンデルセン 1989 第一巻 (大畑訳) S. 261f.)。

同様にグリム兄弟の「6羽の白鳥」(KHM 049)でも、継母によって白鳥にされた6人の兄たちを救うため、少女はエゾギクで6枚のシャツを作らなくてはならない。そして6年の間、口をきいても、笑ってもならないのである。その間に王に見初められて結婚するが、姑の策略によって、妃は生んだ子を食べたという罪を着せられ、火あぶりの刑の判決を受ける。しかしすんでのところ6年が過ぎ去り、白鳥が飛来する。兄たちは魔法から解放され、元の姿に戻り、妃は弁明することが出来るようになる。

妃は、王のところに行こうと言いました。「あなた、私はやっと話すことができます。それで私が無実で、あらぬ罪で訴えられていたことを、打ち明けることができます。」そして、姑が騙していたこと、彼女が3人の子どもを連れ去り隠したことを王に語りました。そこで、子どもたちが連れてこられて、王様も大いに喜びました。そして意地悪な姑は、罰としてたきぎの山の上で縛られ、燃やされて灰になりました。けれども王と王妃は、6人の兄たちと一緒に、長いこと幸せに平和に暮らしました (Grimm 1980 Bd. 1 S. 256)。

こうしてみるとグリム兄弟の方が簡素に語っていることが明らかである。しかしこれはアンデルセンの作品のうちでも、民話に近いもののひとつである。

第2節 登場人物の心理描写の比較

グリム兄弟は改版の過程で描写を増やしはしたが、それでも他の創作昔話と比較してみれば、それらよりは描写が少ないことが分かる。

第1部第2章で考察したように、グリム兄弟の加筆には、登場人物の考えていることを書き加えるという傾向があった。本節では、この登場人物の心理という観点から、前節でとりあげた人物による昔話との比較考察を行ってみたい。

ストラパローラの「豚の王様」(第2夜第1話)は、グリム兄弟の「ハンスはりねずみ坊や」(KHM 108)に相当する話である。既に引用したように、豚の姿をした王子が生まれる話であった。この王子は、3度結婚するまでは、本来の美しい姿に戻れない運命なのである。そこでは、婚礼のベッドにも汚いままあがる豚の様子と、花嫁の考えていることが以下のように描写されている。

就寝の時刻になると、若い娘はこう考えました。「こんな臭い家畜とどうしろっていうのかしら。今晚、あいつが寝入ったら殺してやりたいわ。」豚は、遠くないところにいたので、これを耳にしましたが、何も言いませんでした。その時がくると、豚は泥や汚物で汚れたまま、豪華なベッドに行きました。鼻と前足を使って素晴らしいリネンの布を持ち上げ、全てのものを臭い糞で汚しました。そして花嫁の隣に横になりました (Straparola 1904 S. 77)。

このように、娘の考えていることが描写されてはいるが、ストラパローラにおいてはやはり、さほど詳しく書き込まれてはいないのである。

次にムゼーウスを見てみよう。既に引用した「3 人姉妹の年代記」の、続きの部分である。長女を妻に与えるという約束を熊と交わしてしまった伯爵が、帰宅し、さまざまに考えをめぐらす場面である。

ご存知のように、人間と同じように冷静に話したり振る舞ったりすることが出来る熊は普通の熊ではなく、魔法にかけられた熊なのです。伯爵はそのことに気がついて、毛むくじらの媚殿を計略を用いて欺いて、堅固な城に立てこもって、取り決めた日に熊が花嫁を連れに来ても、中に入って来ることができないようにしようと考えました。魔法にかけられた熊に理性があって言葉が話せたとしても、熊にすぎないのだし、普通の熊の特性しかないだろう、と彼は考えました。だから鳥みたいに飛んだり、夜にでてくる幽霊みたいに鍵穴から鍵がかかった部屋に入り込んだり、針の穴から滑り込んだりすることはできないだろう、と。次の日伯爵は妻と娘たちに森での出来事を話しました。ヴルフィルト嬢は、おそろしい熊に嫁がなくてはならないと聞くと、驚いて気を失って倒れました。母親は手をよじって大声で嘆き悲しみました。妹たちは悲しみと恐怖のあまり心配して震えました。パパは外に出て、城の周りの壁や堀を見回って、鉄の門の錠や門が大丈夫かどうかを確認して、跳ね橋を上げ、全ての入口に錠をきちんと掛けてから、見張り台に登りました。鋸壁の下の高いところに小部屋があり、頑丈な壁に囲まれていたので、その中に娘を閉じ込めたのです。娘は絹のような亜麻色の髪をかきむしって、空色の目をすっかり泣きはらしていました (Musäus 1972 S. 10ff.)。

下線部のように、登場人物の心理や考えを詳しく描写しているのが特徴的である。また、娘の髪の色や目の色などが描写されているのも、民話の抽象的様式¹からは外れている。ここでも、グリム兄弟が『昔話集』初版のみに採用した話 (KHM 082a) の該当部分と比較してみよう。

そして熊が鍵穴をくぐりぬけることはできっこないだろう、だから全てを閉めきっておけばよい、と王は考えました。そして全ての門に鍵をかけさせ、跳ね橋を上げさ

¹ 民話は、人や物の個性化を放棄しており、詳しい描写をしない (Lüthi 1992 S. 25ff.)。

せ、娘には安心していうように言いました。そして熊の花婿から身を守れるよう、高いところにある鋸壁の下の小部屋を娘に与え、7日が過ぎるまでそこに隠れているように言いました (Grimm 1986 Bd. 1 S. 365f.)。

グリム兄弟は、『昔話集』に掲載するにあたって、ムゼーウスのテキストから娘の様子や反応を全て削ぎ落とし、父親の考えていることの描写もかなり簡略化したのであった。

一方創作昔話では、登場人物の考えていることが詳しく描写されることが多い。ホフマンの『王様の花嫁』(副題「自然に取材した昔話」)は、『ゼラーピオン同人集』の第4巻に収められた昔話である。そこでは、土の精のダウクス・カロータが大名行列を作って求婚にやってくる。それを迎えるエンヒェンは、大行列を目にして次のように思いをめぐらすのである。

エンヒェンお嬢さんは、小さな男爵が話しかけてきたので、とても驚いたのですが、徐々に気を取り直しました。それで、こんな状況下では当然ではありますが、やりくりのことをあれこれと考え始めました。「どうやったらあんなに大勢の小人たちを、この小さな家に入れることが出来るでしょう。こんな状況だから、少なくともおつきの人たちは、大きな納屋に寝てもらっても許されるかしら。それにしてもあそこにだって入りきれぬかどうか。それから馬車に乗ってきた貴族の人たちはどうしましょう。あの人たちは、きれいな部屋で柔らかいふかふかのベッドで寝るのに慣れているでしょうし。[...]でも、最悪なのは、まったくもう、一年分の食料のストックで足りるかということだわ。小人たちがあんなにいたら、小さい人たちだけけれど、2日しかお腹を満たすことは出来ないかもしれない (Hoffmann 1967 S. 519)。

こうしてホフマンにおいては、現実的なやりくりを考えをめぐらすヒロインの姿がユーモラスに描かれている。それに対してグリム兄弟の昔話では、第I部第2章で考察したように、改版の過程で描写が追加されていったとはいえ、創作昔話ほどの描写欲は感じられない。

孤独

リュウティが指摘しているように、民話では、登場人物は平面的に語られ、感情を持たない存在とされ、筋と関係のないところでは、その感情が示されることはない。そして表現される場合にも、心理描写ではなくそれが具体的な行動に転化されるのが常である。

それに対してティークの『金髪のエックベルト』では、登場人物の奥行きのある生々しい感情世界や内面世界が、女主人公ベルタによる一人称の語りで、浮き彫りにされているのが印象的である。

父親に穀つぶしと言われ折檻されていたベルタが家から逃げ出し、ひとりでさまよう場面を見てみたい。

私は丘を越えたり、岩壁の間にあるくねくねした道を歩いて行ったりしなければな

りませんでした。それで自分は今、近くの山地にきているに違いないと察しがついて、**孤独の中で恐れを感じ始めたのです。なぜなら、私は平地におりそれまで山地を目にしたことがなかったのです。そして山地のことを誰かが語るのを耳にした時、その言葉は、私の幼い耳にはとてもおそろしく響いたものでした (Tieck 1986 S. 6)。**

ここでは、ベルタが恐れを感じる理由までもが説明されている。またこの「孤独」こそが、『金髪のエックベルト』における中心モチーフであり (Schlaffer 1969 S. 225)、所々に表されているものなのである。

そこにはもはや人家などありませんでした。また、このような荒野では人家に出くわすことがあるとも思えませんでした。岩壁はますます恐ろしくなり、目もくらむような深淵すれすれのところを通り越さなければならないこともしばしばでした。そしてついには道が行きどまってしまったのです。私はすっかり絶望して、泣き叫びました。すると私の声は、岩壁の谷にこだまして、恐ろしい声になって反響してきました (Tieck 1986 S. 7)。

ここでも音の反響など、効果的な描写が際立っている。

『金髪のエックベルト』においては、個々の素材は昔話風なのだが、登場人物の好奇心、憧れ、恐れ、絶望、幸福など、昔話の中に内包されてはいても描写されることのない人間の内面が、前面に押し出されていることが特徴である (Schlaffer 1969 S. 225f.)。

一方、グリム兄弟の「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 015) での、自分たちが森に捨てられる運命にあることを知った時のふたりの子どもの反応は次のようである。

グレーテルは、さめざめと泣いて、ヘンゼルにこう言いました。「私たち、もうだめね。」ヘンゼルはこう言いました。「グレーテル、静かにおし。悲しむのはおやめ。僕がなんとかするから」(Grimm 1980 Bd. 1 S. 100)。

グレーテルも涙を流しており、悲しみが行動と言葉で表されてはいるものの、ティークと比較すれば、登場人物には厚みが欠けており、淡々と語られている。そのことは、両親に置き去りにされたヘンゼルとグレーテルが森をさまよう場面にもいっそう明確に表れている。道しるべにするために蒔いておいたパンくずが鳥に食べられてしまい、家に帰る手段を失ったふたりの子どもは、「すっかり絶望」しても不思議ではないところであるが、ここではグレーテルの反応については一切描写されず、ヘンゼルがわずかにこう言うだけなのである (引用は最終版より)。

「道はきっとみつかるよ。」とヘンゼルはグレーテルに言いました。しかし道は見つかりませんでした。ふたりは、その夜と、次の日の朝から晩まで歩きました。それでも森から外に出ることはできませんでした (Grimm 1980 Bd. 1 S. 104)。

さらに「千枚皮」(KHM 065) という話にも、ティークのベルタと同じように、娘が自ら

家を出ていく場合がある。千枚皮の場合は、自分を妻にしようとする父親 (実父) から逃れるべく、大きな森の中へひとりが入っていく。

そして、神に身をゆだねて、立ち去りました。そして娘は夜通し歩いて、大きな森の中まで来ました。そして疲れていたのも、木の洞に入りこんで眠りました (Grimm 1980 Bd. 1 S. 352)。

ここでも千枚皮の不安や孤独感は一切描写されていない。

むろんグリム兄弟の『昔話集』においても、創作昔話に近い描写がなされている場合もある。例えば「森の家」(KHM 169) では、父親に昼飯を持っていく途中で道に迷った末娘の考えていることが、次のように描写されている。

娘は、どっちに行けばよいのか分かりませんでした。娘はとても心配になって、私が来なかったら、かわいそうなお父さんはお腹を空かせるだろうし、やさしいお母さんがどんなに悲しむことか、とずっと考えていました (Grimm 1980 Bd. 2 S. 316)。

このように考えをめぐらすところは創作昔話に近いが、しかしティークのような切実な感情はグリム兄弟の『昔話集』では感じられず、登場人物はやはり平面に近いと言わざるを得ない。

一次元性

一次元性もまた、リュートィが指摘する民話の特徴のひとつである。民話では、此岸と彼岸には地理的な隔たりがあるとしても、精神的には断絶していないため、超自然的な存在に出会っても登場人物は驚きもしないのである。ましてやその存在を疑うこともない。

しかし創作昔話においては、超自然的な現象や存在に対して、距離をとるような書き方がなされている。ここで、いくつかの例を挙げてみたい。

ハウフの「ザイードの運命」(『シュペツサルツの宿屋』) では、ザイードの死んだ母親は、自分には仙女がついていて信じており、その仙女がくれたという笛を父親に託していた。その笛は、後にザイードを困難から救ってくれるのだが、笛を手に入れた時、ザイードはそれを信じるべきかどうか、あれこれと考えをめぐらせるのである。

しかしすぐに考えは、母の謎めいた言葉に向けられた。ザイードは仙女 (Fee)¹についてたくさん聞かされてはいたが、この町バルソラの近隣で誰かが不思議な精霊と関係があるなんていうことは聞いたことがなかった。精霊の伝説は遠い国や昔のこととされていたので、ザイードは、今ではもうそうした霊はいないか、もしくは仙女が誰かのところに来て運命に関わるなんてことをもうやめてしまったのだ、と考えてみた。だけれどまた新たに、母の身に起きたという、謎めいたことや不思議なことをやっばり信じてみようという気になるのであった (Hauff 1969 Bd. 2 S. 246f.)。

¹ グリム兄弟が避けた Fee という単語が使われている。

民話では、援助者が贈物を与える場合にも、「贈物を受け取る者は、驚いたり、疑ったりすることがない。不思議な物を試すこともせず、それが必要になって初めて使うのである」(Lüthi 1992 S. 9)。この点から見ても、ハウフの登場人物は、創作昔話らしい振舞いをしていけると言えるだろう。

ハウフよりはるかに民話に近い A. L. グリムの「バイオリンを持ったちびのフリーダーの愉快な話」(『リーナの昔話集』)は、グリム兄弟の「いばらの中のユダヤ人」(KHM 110)に相当する話である¹。どちらの話においても、主人公の男は、給金にもらった 3 ヘラーと交換に、「狙ったものを必ずしとめることの出来る鉄砲」、「聞いた人が踊らずにはいられなくなるバイオリン」、「自分の (最初の) 頼みは誰も断れないようにすること」という 3 つの願いを叶えてもらう。まずは、A. L. グリムの「バイオリンを持ったちびのフリーダーの愉快な話」において、灰色の男から「狙ったものを必ずしとめることの出来る鉄砲」を受け取る場面を見てみたい。

そこで灰色の男は、どこから出したのかフリーダーが目にする間もないほど素早く、すばらしい鳥撃ち鉄砲をとり出し、フリーダーに渡しました。それはちびのフリーダーのほとんど倍くらいの長さがありました。けれどもフリーダーはこう言いました。「でもお金を渡す前に、まずはそれがちゃんとしたものかどうか試してみなければならぬ。」そして遠くにある木の葉っぱに決めて、それを狙って撃ちました。その葉っぱは、まるで、そこには最初からついていなかったみたいに、飛び散ってしまいました。それで、フリーダーは、機嫌よく男に 1 ヘラーを渡しました (A. L. Grimm 1816 S. 165)。

このように、不思議な力を持つ贈物を受け取った主人公が贈物の力を試してみるところが注目される。上記のリュートィの指摘に照らして見れば、A. L. グリムの主人公は、この点において民話の形式から少し外れているのである。一方、グリム兄弟の「いばらの中のユダヤ人」(KHM 110)の主人公は、受け取った物が本物かどうかを試すこともなく、機嫌よく道を進んで行くのである (Grimm 1980 Bd. 2 S. 126)。

第 3 節 理由づけの描写の比較

本論の第 I 部で考察したように、グリム兄弟の加筆には「理由づけ」をする傾向も見られた。ここではその観点からの比較を行ってみたい。

創作昔話では、とりわけ不思議な現象を合理的に説明しようとする傾向が顕著である。

ペローの「眠れる森の美女」において、王女がつむで手を刺し、気を失って倒れた後の場面を見てみよう。

¹ オランダ語版では、この A. L. グリムの話がグリム兄弟の『昔話集』に掲載されていたことは、既に指摘した通りである。

百年の眠りにつくことを言渡して王女の命を救ったやさしい仙女は、王女の身にこの事故が起こったとき、宮殿から一万二千里ほど離れたマタカンの王国にいました。けれども、七里の長靴（それをはくと一またぎで七里行ける長靴）をはいた小人の知らせで、すぐにその事故を知りました。仙女はただちに出発し、一時間後には、龍に引かれ火に包まれた四輪車で着きました。王は手を差し伸べて、仙女が車から降りるのを手伝います。仙女は王のしておいたことは、みな結構だったといましたが、とても先見の明があったので、王女が目をさましたとき、この古い城にたったひとりではさぞ困るだろうと考えました (ペロー 1982 (新倉訳) S. 161f.)¹。

グリム兄弟の「いばら姫」(KHM 050) においては、いばら姫と共に城の中の人も動物も皆が同時に眠りに陥っているが、なぜそのようなことが起こるのかは説明されていない。むしろ、賢い女²も前もってそのようなことを予言してはいなかった。それに対してペローでは、王女が百年後に目覚めたときにひとりでは困るだろうと仙女が考え、「杖で触れ」て人々を、眠りに陥らせているのである。このように、百年の眠りという超自然的な出来事への仙女の対処の仕方は、妙に現実的であり、その行動の動機づけがなされていることが特徴であろう。さらにここでは、仙女がいた場所、そして城に向かう際の描写なども、具体的なのが目につく。

次にオーノワ夫人の「ロゼット姫」だが、これは既に指摘した通り「白い花嫁と黒い花嫁」(KHM 135) に相当する話である。どちらの話にも、嫁入り途上の花嫁が悪意によって水の中に突き落とされる場面がある。グリム兄弟は、そこを次のように語っている。

継母は言いました。「ちょっと馬車から外を見てごらん、と兄さんは言ったんだよ。でも馬車は、ちょうど深い川にかかった橋を通っていました。そして花嫁が立ちあがって馬車から身を乗り出した時、ふたりが花嫁を外へ突き飛ばして、川の真ん中に落としました。花嫁が水に沈んでしまうと、ちょうどその時、雪のように白い鴨が、水面から浮かび上がって、川を下って泳いでいきました (Grimm 1980 Bd. 2 S. 231)。

この場面について、グリム兄弟の『注釈篇』には次のような記述がある。

水の中に突き落とされた女が雪のように白い鴨の姿で飛び立ち、生き続けるのは、つまり白鳥の乙女 (Schwanenjungfrau) として現われているのである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 230)。

やはりグリム兄弟は、ここにも神話の名残りを見出していたのである。

¹ Perrault 1866 S. 34f.

² グリムが第 2 版より、「仙女」(Fee) を「賢い女」(weise Frau) に変えたことは、第 I 部第 2 章で指摘した。

白鳥の乙女の伝承については、ヤーコプが『神話学』の中で「今でも北欧の民族の中に息づいている」(J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 354)として、次のように内容を紹介している。「3羽の白鳥が浜に降りてきて、白い鳥の衣を草むらに置く。すると鳥は美しい乙女に変わる。それから水浴をし、ふたたび衣をまとい、白鳥の姿で飛び去る」のである(J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 354)。多くの伝承においては、それを見ていた男が、乙女が水浴びをしている間に「白鳥の指輪」もしくは「白鳥の羽衣(シャツ)」を奪い、一羽が戻れなくなっている¹。

ヤーコプはさらに、この伝承がドイツにおいても『ニーベルンゲンの歌』まで遡ることが出来ることを指摘している²(J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 354ff.)。

さらに、「白い花嫁と黒い花嫁」の中で、白い鴨となった花嫁が火に当たるために城の台所にやって来るところを、グリム兄弟が「エイルの人びとのサガ」に関連づけていることは、本論第Ⅱ部で既に指摘した通りである。

こうしてグリム兄弟が昔話の中に神話を見出している一方で、オーノワ夫人は、次のように物語っている。

以下に引用するのは、花嫁となるロゼット姫が孔雀王のもとに船で向かう場面である。

ロゼット姫がぐっすり眠りこむと、それを待っていた腹黒い乳母は船頭を呼んで姫の寝室に招き入れました。二人は姫の目をさまさないようにそっと、羽根布団や、敷布や、敷布団、それに毛布ごと姫と犬を持ちあげて、海に投げすててしまいました。乳母の娘も一生懸命になって手伝いました。姫はあんまりよく眠っていたので、全然目をさましませんでした。

しかし幸いなことに、羽根布団はとても珍しいフェニックスの羽根で出来ていたのです。この布団の上に乗っている限り、決して海の底まで沈んでしまうことはなかったのです。つまり姫はまるで船に乗っているようにベッドの上で波間を漂っていたのです。けれども水はじわじわと羽根布団をぬらし、それから敷布団まで滲みってきたので、ロゼット姫は布団がぬれているのを感じて、おねしょをして叱られる夢を見ました(オーノワ夫人 1981(上村訳)S. 162)³。

布団が沈まなかった、もしくは姫が溺れなかった理由がこのように説明的に語られているだけでなく、おねしょをしてしかられる夢を見るといった現実に引き寄せたユーモアは、グリム兄弟の昔話には見られないものである。

オーノワ夫人と同様にムゼーウスも、超自然的な出来事の説明を試みている。「白雪姫」(KHM 053)に相当する「リヒルデ」では、継母リヒルデがブランカを3度殺そうとする。殺しに使われた道具は、毒入りざくろ、毒入り石鹸、毒を仕込んだ手紙であるが、継母は、3度とも医師のザムブルにそれを作らせている。「白雪姫」と同様にブランカは3度とも死んだようになるが、結局のところは助かる。なぜブランカが死に至らなかったのかとい

¹ これは、グリム兄弟の『昔話集』では「太鼓たたき」(KHM 193)において語られている。

² 第25歌章で、ハゲネらは水浴びをしている乙女らに出会う。ハゲネは彼女らの衣を奪う。水の乙女は、未来を予言して衣を返してもらう(相良 1996 後編 S. 108ff.)。

³ D'Aulnoy 1997 Tome 1 S. 194.

うことが、最後に医師ザムブルによって説明される。

ざくろの時には [...] 中に潜ませるよう言われた毒の代わりに、睡眠性のエキスを、半分にしみこませました。それは、体を壊すことはなく、五感を麻痺させるものでした。二度目の石鹼の時も同じようにしました。ただ、ケシの実の汁の量を増やしていたので、ブランカは前回と同じ時には目覚めず、小人たちは死んでしまったと思い込み、またもやお墓に運んで一所懸命に見張っていたのでした。[...] 医師ザムブルは、化学の知識を駆使して、麻酔剤から揮発性の塩を精製しました。これは空気に触れるとすぐに溶け出て、吸収されるものですが、これを美しいブランカ宛ての手紙に塗りこめたのでした。ブランカは手紙を読むとすぐに、ケシの成分を吸い込んですっかり麻酔にかかりました。この効果はあまりにも強かったので、肉体はそれまでよりも長く硬直が続きました (Musäus 1972 S. 101f.)。

さて、ホフマンの『小人のツァヘス』での、不思議な馬車についての描写は、既に引用したが、その馬車の様子をプルヒャーから聞いたファビアン (友人) は、その馬車や一角獣などを合理的にこう説明してみせるのである。

彼の乗り物は、君みたいな空想力豊かな人だったら、一切がすばらしい昔話 (Märchen) から出てきたものだと信じ込んでしまうように、へんてこに作られているのさ。まあ、こういうわけなんだよ。——彼の幌馬車は、貝の形をしていて、銀メッキがほどこされているのさ。両輪の間には、手回しオルガンが仕掛けてあって、車が動くとき自動的に音が鳴るようになっているんだ。君が銀の雉と思ったのは、白い服を着た小さい御者に違いない。それから開いた日傘の片を、金のかぶと虫の鞘羽だと思ったのさ。それから 2 頭の白馬に大きな角をねじでつけて、伝説っぽく見せかけているのさ (Hoffmann 1967 S. 163)。

しかし、ホフマンにおいては、こうした合理的な解釈が示されてはいるが、不思議な出来事はさらに起こり、登場人物も読者をも不思議な世界に引き込んでいくのだ。こうした合理的な態度は、昔話を重層的にし、深みを出すための手段であり、単純な合理化とはいえないが、本論はホフマンの昔話を詳しく追うものではないので、グリム兄弟の加筆に話を戻したい。

さて、本論の第 I 部で見たように、グリム兄弟が理由づけを書き加えた場合でも、王が愛する妃に死刑を言い渡す理由であったり、娘が井戸に飛び込む理由であったりはするのだが、不思議な出来事を理由づけたり、合理的に説明することは行っていない。また、グリム兄弟の昔話においては、登場人物は不思議な出来事にめぐりあっても、それが幻想かどうか危ぶむこともなく、淡々と行動している。つまり、描写の量は増やされているが、それらが、民話の本質である一次元性や人物の平面性を著しく逸脱する場合は少ない。だからこそ、グリム兄弟の昔話は加筆後も民話に近いものと感じられているのではないか。

第4節 グリムの描写の裏に「神話」あり

さて、ここで再びグリム兄弟が増やした描写について別の角度からの考察をしたい。最初に、「蛇の話」(KHM 105) の第1話に第5版より追加された文章から見てみよう (第I部第2章第3節参照)。

この話では、ある子のところに、いつも蛇がやって来ては、一緒にミルクを飲んでいる。第5版で付け加えられたのは、以下にゴシックで示す箇所であった。

蛇も、感謝の気持ちを示しました。なぜなら子どものために、隠している宝の中から、あらゆるすばらしい物、輝く石やパールや金のおもちゃを持って来たからです。しかし蛇はミルクしか飲まず、パンを残していました。そこでその子はあるときスプーンを取って…… (第5版, S. 111)

こうした加筆は一見、単なる描写欲から行われたものに見えるかもしれない。しかしグリム兄弟はここにもやはり神話とのつながりを見出していたのである。

『神話学』の「樹木と動物」の章に、この昔話に関してのヤーコプの記述があるのだ。

家の中でも、ひとりぼっちの子どもたちのところに蛇がやってくる。蛇は子どもたちと一緒に器からミルクを飲む。蛇は金の冠をかぶっており、ミルクを飲む時には、それを頭からはずして地面の上に置く。そして帰る時に忘れていくこともある。蛇は、ゆりかごにいる子どもたちを護り、もう少し大きな子どもには宝を見せる (J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 571)。

上記の加筆も、こうした神話的な価値を踏まえた上で行われたのだろう。さらにこの蛇については、ヴィルヘルムも『昔話集』第2版の前書きの中で、このように記している。

金の上でとぐろを巻く白い——すなわち輝く——蛇 (ファーヴニル) は、(昔話での) 頭に冠をのせた蛇と一致する。この蛇は価値のある宝を集めている (W. Grimm 1992 Bd. 1 S. 344)。

昔話の中の蛇を北欧神話のファーヴニルと関連づけ、宝を集める存在と見なしていたからこそ、この蛇も子どもに宝を持っていくことが出来るというわけである。

さて、印象的なフレーズが付け加えられた例として、本論第I部で扱った「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 015) の例を次に考察したい。

ヘンゼルとグレーテルがお菓子の家をかじっていると、家の中から「ぽりぽり、ぽりぽり 私の家をかじるのは誰だ？」という声がする、あの有名な場面である。初版においては、子どもたちは返事をせずに単に驚いていただけだったが、第2版より、「風だよ、風 天の子だよ。」(S. 77) という返答が付け加えられたのであった。これは、『昔話集』初版の著者保存本にグリム兄弟自らが書き込んだメモに従って変更されたもので、ドルトヒェン・

ヴィルトから聞いたフレーズであることが分かっている¹。

そしてこれが第2版において付け加えられたのも、先の例と同様に、何よりそこに神話的価値が見出されていたからであろう。やはり『神話学』の「風」の節に、書き加えられた上記の言葉が引用されている (J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 525)。

次に、「水の精」(KHM 079) において、初版刊行の際に行われた書きかえに注目してみたい。

1810年手稿

兄と妹が水の中に落ちました。そして水の精に捕まりました。水の精は、たいへんな仕事を与えました。そして妹は、穴のあいた樽に水をそそがされ、少年は切れない斧で木を伐らされます (S. 284)。

初版

兄と妹が泉の近くで遊んでいました。そして遊んでいるうちにふたりとも中に落ちてしまいました。そこには水の精がいてこういいました。「おまえたちは、私のものだ。さあ、私のためにせつせと働いてもらおうか！」そして少女には、もつれてぐちゃぐちゃの亜麻を渡して紡がせました。少女はまた、穴のあいた樽に水を運ばなければなりませんでした。少年は、切れない斧で木を伐らなければなりませんでした (S. 256)。

こうして描写が増えていることを見て、グリム兄弟が昔話を創作昔話に近づけてしまったと単純に片付けてしまうべきではない。上記のように、捕らえられた少女に他ならぬ「糸紡ぎの」仕事を課しているのは、グリム兄弟が水の精をホラ (ホレ) と同一視しているからなのである。グリム兄弟は「水の精」(KHM 079) に付けた注釈の中で、この水の精がホレおばさん²である、それも意地の悪いホレだ、と指摘している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 140)。ホレはホラともよばれるが、それが「紡ぐ」女性であることは、『神話学』においても指摘されている (J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 223)。そして一方では『昔話集』の「水の精」に上記の描写を加え、他方では、『神話学』の中に水の精の説明として、「彼女 (水の精) は、ホレおばさんと同様、子どもたちにもつれた亜麻を渡して紡がせる」というように、上記で加えられた箇所を取り上げているのである (J. Grimm 1992 Bd. 1 S. 411)。

さらにこの昔話においては、兄と妹が水に落ちた場所が、初版から「泉」と具体的に示されるようになっていく。これも、単なる描写の具体化ではなく、ホラは「泉」に住んでいるという記述が『神話学』にあることから説明がつくだろう (J. Grimm 1992 Bd. 2 S. 819)。

本節で考察してきたように、グリム兄弟は、昔話の形を整える際にも、神話の残滓というものを考慮していたことが推察される。すなわち、グリム兄弟による加筆を考察する際には、こうした側面にも注意を払う必要があるということになるだろう。

¹ ヴィルヘルムは、「ドルトヒェンより 1813年1月15日」というように、語り手と日時に関する情報も著者保存本に書き込んでいる (Grimm 1986 Bd. 1 S. 54)。

² 『昔話集』の「ホレおばさん」(KHM 024) にもホレおばさんが登場する。「ホレおばさん」伝説については、橋本の研究がある (橋本 1996)。